駿台雜話

禮集

東京圖書館
和書門
雜書類
二七函
二三架
五冊

142
5
54

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54

ガラス使用

駿台雑話巻三目錄

禮集

天下も天下も天下
杉田玄白
阿閉柳郎
嶺寒松栢
烈女維那
天野平兵衛
二人の兒

直諫も一策捨てがた
伴大膓
士の風義
多折しも春風
澤橋の母
結髮のゆう

TOKYO LIBRARY
大閣藏書
明治九年交換

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

駿台雑話巻三

天下の天下

奢侈(しゃし)驕奢(きょうしゃ)事(こと)甚(はなはだ)しくなり、費(ついえ)を省(はぶ)き倹約(けんやく)を行(おこな)はんと欲(ほっ)すれども、人(ひと)皆(みな)これを笑(わら)ひ、吝嗇(りんしょく)なりと悪(にく)むゆゑ、倹約(けんやく)を行(おこな)ふ人(ひと)なし。天下(てんか)の人(ひと)皆(みな)驕奢(きょうしゃ)に流(なが)れ、費(ついえ)を省(はぶ)くことを知(し)らざるゆゑ、天下(てんか)の財用(ざいよう)乏(とぼ)しくなり、国家(こっか)困窮(こんきゅう)に及(およ)ぶ。やむことを得(え)ず、倹約(けんやく)を行(おこな)ふ時(とき)は、天下(てんか)の人(ひと)皆(みな)吝嗇(りんしょく)なりと悪(にく)むゆゑ、倹約(けんやく)を行(おこな)ふ人(ひと)なし。古今(ここん)共(とも)に歎(なげ)かはしき事(こと)なり。

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

とゝろよく親を親とし賢を賢とし我等ゝゝ徒もかの徒も
もなきやうに孝弟まことも楽と楽しに利を利として優游して
卒に寒暑ともに皆春のごとくなるが如し欧陽永叔豊楽亭記に
著して宋の太祖四海の机を定めて天下ともに
此而年豊事楽ともに安んぜしむるの意なり
ひとり禹のみ然るにあらず。
栗照宮凡そ梯す雨よ沐し汗下生の力をあて撥乱反正
治るにおよび人百有餘年干戈動の久四海浪静なるに
て天下泰平の化治ねく及ぶ。これ恩化の厚きを戴くさま
治ると我等と死ゝゝき方をまもれども上の御盛徳

その偉く世よ傑れ群臣のまなれざるにあらず。儒臣のまなれざるにあらず。
ゆゑ〳〵奉感ふかきものを世よあるゝ事なり。
今若の勇あり活ける民。天下もそとくする人。鞘の書よいて。天下の
きるものゝ。最萬世不刊の名言とも。
三代を降ること。おのゝ剣業の君。
て。天下安くするもの。ゝ明の太祖剣業のごとく。中山王
徐達軍中ゝく疾を得ると風疹ゝゝ諸医を
召ゝゝ療治せるもの。ゝゝ。

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

向こう山川社稷よく護らく。今数年後達の命をおくらるるよおおくなく逆こ死せん時。朕の命も一旦よこそ終へと悔よ告給へ。古祖の諸将徐達を第一とし。天下を平定すの功。徐達よきなり。十時天下甫定まりて。達先死しまきを朕おきて泣こと甚しかりき。其後徐達の死を聞きて。せめて粥の喪を言るのをもてきまをこのなりて。せめて粥の喪をみて。死や共徐達もよ死なんと。竹の気をこの書く徐よちこのごとなる也。前明の史館を漆くよくよ勘くして。おくる。古よく真くを真くとも別のまをと思く。帝王有真と。しくさるわ。もおくよくよく徐達の死をきして。家嗣も定まる。壮穆

も固くたとしも祖崩ぜられくも。そよ危きまなき程なくの給へそう。さまと天下をはくくも。なくな命して。竹の死の楽をきくもとしや。功臣の死をうはくて死我同じんと稽よ給へしまきよ。功臣の死をうはくて死我とくく楽と世よ。おくて天下をはるを楽をせうとくく共心そうめまて天下を天下の天下とうて。二人の天下と世はまる。漢の高祖光武なる。同一規模なる也。十大器量なくくハ天下を得る。そ小児のもたしきなる。天下我ものくくと言たるやうおくくも。やて第二。秦の始皇楚の項羽。豪勢おくもち。

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

此、信長秀吉をはじめ志ありしも、権現様も不仁(ふじん)なくして天下を治め
さる事なく、志のしかるべき天下を治むべき器量に非されは、古
人も深山(しんざん)有(あり)寶(たから)無(なき)心(こころ)於(に)寶(たから)者(もの)得(うる)之(これを)といへり。天正十四
年の事にや、長湫(ながくて)合戦(かっせん)の後
東照宮すでに豊臣秀吉と和睦(わぼく)ありし時、秀吉使を遠州浜(えんしうはま)
松へ遣して大坂へ来会(らいくわい)をすゝめ給ひしかども、
御同心なかりし時、頻(しきり)に使者を遣はし、やむ事なくば上
洛もなされ同心ありし時、秀吉母氏大政所を質(しち)として、御
上洛を待ましまし、御上洛あるべきのよし仰せあれ
ども君臣(くんしん)危(あやう)きのよし、おそれ給ひて、一同にやすからぬ事にや思ふ

上洛ありしかば秀吉は、うち悦び、鉢楯(むしゃ)に及びしも、もしやなにもなく北ら國の
はかりきはめて及ばれざるには帰る一命をすてゝ御(み)方(かた)にきはめて、秀
吉百萬の兵といふとも、命をすてゝ、敗(やぶら)きはめて一命を失ひしは、一危き
事に越して皆事なくして、とても奉行して上洛せんとの
時、候まもなく、御越しの御事もなく、秀吉の威勢(せい)におそれて上洛せんと
中にもあるゆゑ、遠く見るに天下の兵乱久しく打續きし比
は人も千人(うむくわ)の人を催し、戦都(と)鄙(ひ)安(あん)堵(と)せず、わかくして一命を
の民、漸(やうやう)天下静謐(せいひつ)に向ひける時に、某(それがし)秀吉と評楯(?)にて
よび打合ひ、又争乱(さうらん)あらば、天下の大難にかゝはるべし。しかし遠
て不(ふ)慮(りょ)の変もあらば、其時は天下の為めに、一命をすてんと覚

招きよせて、ともに肝胆を砕して、とうとう
及ぶ事能はず。因法をもて前途を時
よく作り、多き人を危しとおもひ
わらひて、そのまゝおのが身を以て
代替わりと作らまゐ一言の係も
て天名人を感動おもく、天下
八明の君神と仰ぐ功臣の死を救
東照宮八命を軽く天下の
器量の大きあつて、いかで寛永
ばに仁心深厚なる、あらく
の法のおもき、おもく人の命
東照宮の御軍功のまゝと法をおひら、其序
事語にそく其書をかき残しとゝ
渡よまゝにき。寛永
そ世の智謀を好む者。
命を捨まで常に権詐を尚ふ
なうら。其報もなきまゝの
直諫を一言発の雅
さる八古今の侵漢ともよ。剣業の君
とくたゞよ。天下を得くる。業基を

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

ハなり。志うく天下を治ん人の私物とおもひそなよ。治世の後も、さこの此栄華を久しからんと、子孫の為くに汲〻事を営ミ、天下の簒逆の謀を貽しとぞ。

室暉累治れ代を遂く昇平なる故、のばかりの人心も忘れ、武道に泳ぎ羽生ミ合戦おもしろく思ひ、天下を志ん事を願ふ。世よりもとなりぬれバおそはるゝ事ハなし。かゝる名も遺るくし。

其ゆへ大仏を建立せくとも、人ハ十万ばかりよりハ多くハ集まらじ。されバ我も一方の名を残さまほしく、天下共に争ふ。

より貽すなり。況大仏殿つくり建ん事、多くハ無益なる事ハ、人皆知ることなれども、なほ人を労し財を費やすハ、天下の害なるをおもハず、目前の小利に迷ふ故なり。

昔、ある人、いまの世ハ肩を比べ事共ハ、朝舞を伝伐して、おほくの人を雇ひ、大仏を建立てんより、天下の貧窮を救ひ、困苦を扶ケんハ、功徳の最大なるべし。

況や今の光の治廟、此ところハ泰山のごとく、固くましまして、奉祀を永代不朽の礎石と

こゝろをそれて別して其の感心奉るべきなり。こゝろえ古今よ傑出の御ものゝ聡明よく世の内自分の聡明よく傲下の直言を納もらせ給ふ事あれ聡明ともすれば人君其の徳を傷るよし諫をこゝろえおそれ聖人よりもまさりたまふ事必過失おほきものとて虚損の疾の補薬をこゝろへよくなるの頼おほし。うたがひ給ふべからず。虚損の病を補薬をこゝろえ虚損ますます病ともおほし。まことに英明の君よく自ら省て過失なきやうに忌憚なく直言を納給ふべきなり。古の代の諫議心言なる友をもてときゝ求諫要とすることなり。今くハ甚名ろうまゝ。直言する人を退き改めず。阿諛する人をやもすれバよろこび迎参おまきやうに改めず。国よく国政おまこともやすく古今の通患おまき。いくたや衆の武家の代の末の世にこゝろえよくなるの生成をとゝくして割しよりて。下を治むる勢力をとゝくして。よりて。云治塞てやすく下治まりかたく。国まり内よく治まりかたきのよし。古今のおまこやのよし。おゝく東照宮兵乱擒擾の万よりの出よりて。常よ云路をひらき下をおさめとゝのへ。古今にすぐれたまひ

御事とも見へし。遠州濱松(ゑんしうはままつ)の御城に御座なされし時。ある夜
本多作左衛門并に外様の者二人御用の事ありて御前に召
さる。御用すみて。二人の者ども退出しければ。中に一人御前をさく
鼻紙袋の中より落紙の物一通落たりし。自分に御前へおちくじ
わけなれど其まゝとらせ給ひ御覧あれば。何事か私の事を
御事とも書付をきゝ申に。其まゝなにとなく方々ひとらせ給ひ。これを懐
中におさめ給ひて。又なにと仰られもなく。さてあとにては
奇特(きどく)なる人。今の人とは感し給ひ。作左衛門を召して仰られ
るは。其者かくありて。さて作左衛門に数箇條ありしを
悦ばれしにや。一箇條をよくみ給ひけるは。かの御事と御

あはれなりとて。其草紙の趣意へとゝく御覧ありければ。さて作左
衛門に御前にて。此後も御心をつけ給ひしと也
御自分の仰を直に立られ候へば。その子細を申上るに
しかるべしとて御前を立ける。其後に作左衛門が一箇條も
居なから申させても。彼若年の身にて仕うまつりしを
御用に立ものとて。御きゝにも及ばれず候へと申上げ
られは。御手を打せ給ひて。やがて申さしめて御用に立る事
ならは重畳なりと。其者相應の禄をたまはり。内々書付をもて我等
に見せんとおもひし志は。何事も奇特なる事也。其
上我等用にたゝぬとて。用に立る様にとおもふ心
あれ。

卒爾(そつじ)なる事をいふまじく、いふ人は貴重なる事をわすれぬ。悔しくしても
下々は家事のあやまちもしらぬものなり。されど小身なる者は
心安くて交遊饗筵などもあまれば、多くはその身の上に悪き事を
いふなく吟味もすれば、是に付て致る事なし。さて小身の
益なるは。大身なる程なる。交遊饗宴も、多くは心安く語ると
いふ事もなく。然れば常には家名をのとくに、家臣(けんしよう)に従ってなす
事を大身には大名の事をはじむとするにても、さねにて、家過(あやまち)を
あらぬことを多し。是は致る心も侍ぬれしても出るのを
たゞし大身の損といふも。古より富貴なるものゝ。国を失ひ
家を亡(ほろぼ)す、大かた我過をしらさるゆゑなりて。自身り

あらぬ事を人の為とても只かなしめ、是いはれなむ。わが過を
告知する者をば大切に思ひ、言を聞きおもはれやと任せしむべし。伯
済のうちなるを深く交へ居らるゝ。おもひとき嫡子上野介に語つて
この世上兆しの思ひの為は、何にはかる仁厚(じんこう)なる事を、いふべく
為済におよびしは上野介として、其人を伝かきけり。其中より
事は、このやうの事においてやと為しきあまり、伯済も上野介をもの
あるべし。多くも上の心の諂諛なる事をも多くし。其人の名をも
中々にしる事も決して申すまじとおもはれぬる。是をさせ
ましとて、上野介年少のおりく。其人を嫌(わざ)するほどなくましく思ひ
うらみなきて其事をきこえんと、いはまして、伯済る合点して。おさ

殺さるゝ也。其後幕府の仕置ども、旗本側より侍
なの気へ上をわすれ、人君をも恐れず、家老共
我儘よりおこるべきを思ひ、自ら君公の威光
を以て諫言をとゝめ、我慢おこり一妻後をするよう
も。おそろしき事ども也。其外細々敵よりも
腹黒をするも。分限ばかりにて、必敵
ようにおもわれ、多くは討死をも。世よ名をのこし、
自ら君をわすれざるをめでたき死にて、幸をもとめざるよう
敵を討ぬるを、君公感ぜられ、恩賞を得、子孫
までも仰ぎを、我慢のもとゝ、貴きも生死ともに
よくわきまへ

直諫すべき、忠言耳に逆ふ物ゆえ、常よりとひ物もなく、礼儀ばかりにて、
よきものなり。そこで、新進客柱の論ひもの也。件の家老と
まで、ゆるく談ずる程ならば、心を遂てゆるし、
ゆるくも用ゆべき、忠言も退屈する故、或
病気と称し、或ハ我仕を引退く分別するそう。
強ひて君公気よく、すこしくも、
極諫にて、君怒を発くとも、又ハ押こめて、
ぬやうにするわざもあるべし。其時の

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

勅諚の志ありて。終るに。世よおぼえ。よりすることなり。我場より一番槍を及くやうさせなどと作らまゝとせん。係よう方迄行て孫共出すべく人数ども。の来さ猶成となりて。

○松田壹岐

そよりよろこぶ。陽陣先登すれば。弥きやすく。犯顔直言すれども。易きやうに。陽陣先登の功を貴ぶまゝと。志ありて。犯顔直言の患をまぬかるゝ。

東照宮御上意を忘れず。寛永の下後。越前松

伊豫守殿の家老。松田壹岐と云もの。其分の材をもつて微賤よりも。庸せられ。厚禄を賜はり。二年在府の間。費用過分なるほど常より。倍々支給して。用度乏しからざらしむ。

ひとへに壹岐の功なりとて。和平の後。直言をもつて。君に過を匡救せんことを。志ありて。主国よく。治まり。陣中よく。整ひしよし。伊豫守殿より。家老ども。へ。書状を遣しける。若とも。に。万一の事もあらば。お陣すべき。上の御用ともいふべ

るそと云ふ。其方ともに能く心得よと有ける。
家老ども、いぶかしく思ひながら。御前の事なれば
とて。しばし壹岐一人を残して。外の者ども皆
々座をたちぬ。其時壹岐申けるは。今の御言葉
畏まり奉つれども。もしおそれながら。御酒に
醉ませ給ひて。御心替りなどあらせられまじ
きや。其時に至りて。後悔あらせられまじき
御誓紙なども。御仕なされ下さるべきや。
そうもなくば。妻子と一所に。こゝを立ち
のくことなりがたし。其時に至りて。
こゝにて腹をきらせられまじきや。
其時よと云ふ。きつと申上ける。頼母しく思召
されよ。

ありとの御返事。おのおの安堵の思ひをなし。伊
豫ち後太刀をよこたへ。事更指つゞき。座敷。狭
ち後の刀ともにて側よりかゝるべしと。
壹岐聞く。其人をそこなはんこと。
仕そこなひを恐れ給ふにや。いざとハ御身を
云そこなふべからず。いざさまたげ給ふな。
くらし給へなどゝ。伊豫ち後のそばへよる。
よわそこなはれ給ふな。おのおのそこなひ
給へさせ給ふな。今御酒をよろしく参りて
御恩の報じ奉る志のあらはしやすべき。頼

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54　　ガラス使用

のべ平伏しきゝ居て、なにとも、いはで奥へいりけるとなむ。
其跡にて、外の家老ども岩波にむかひて、御為をおもひて
申さるゝとはいへども、折もあるべき事なるに、今日は御婚
儀にてあれ、儀式にてありしに、御気色をそこなはゞ作
事は、いかにもあるべき事なるべしといふに、岩波居なほり、諫をやめよとは
よは、採擇を考ふるは、よき折あるまじき物なれば、今日は、よき
序とこそ存じ、其上其事にて、御気色のよきをえらばゞ、若し六
ヶ敷のちは、御咎の老中にては、御前へ出あひ候とも、甚分のる
まじくはとこそ思ひなれ、後家老各感じ、わが思ひさて家り
帰りはく、切腹の用意して、君命の下るを待居けるに、何事もなく月日を経

糟糠（さうかう）の妻は、いつまでもむつましく、そのまゝにすておくこそ本意なれ
侍も、其身は女の身なれば、夫に其恩をうけたるにてもなけ
れども、我は其恩を受けし身なれば、其妻といへど、我身の今歴
歴の妻とて、大勢の所従に圍繞（いねう）せらるゝも、かまはぬきは
恩によれるなり、是までの事は皆主君の恩ゆゑなれども、是
新ら今はこれ恩のうすくなる事を云ひて、今まで依とせ
怨を奉らん事は、あるべからずと、女なれば、我身の上をおもひつけ
て、上を怨みまゐらする事を、義に背く事とも、かへりみねば
黄泉の下にても、嘸や怨みおもはれんと、いひしをきゝて、今や
待居たるに、程なく人来りて、門をたゝき志ゝにける者、中將

まへしとかのまゝさせて了せきとおもひしに空城にきはまりて
援助(えんじよ)めしへハ其方の居所にてしきりにまうしうけて寝られぬるや
陰(いん)かのまゝともよひたわれかのまゝのおやよりも名残まうしてとのく
いらず反て其方の心ざしを深く感しいかく悦ひすると
ますます重き腰の物を賜りしハ壹波も思ひもよらぬまかなく。
おほへまと籠瀬に咽(むせ)ひつゝ拝賜(えいし)してまかりしが、おもひかくもなくしまゝ翁かい殿
よおほし時越前の人かまへく語りし。今おもへハ此枚田氏とする
東照宮の作らまへし世よみとうる我家老とひらも、係に一書
論よりも猶きるすにおほんたし。

伴大膳

さまでは巧佞(こうねい)なる人にて、人君の心に叶ひて、常に任用(にんよう)せら
るゝとも、大切の事に臨て剛直(かうちよく)なる人なくては用にたち難し。
そのためしにいはく、右の枚田事ともちひがたき事なれども、席(ぶり)
雖何を傳へし。大坂冬の陣の前に片桐市正が摂州茨木(いばらき)の
城に據(よつ)て御味方に属せしに、紀州山小笠原の泉州堺に有し岸和田(きしわだ)
かのまゝとを聞て味方の急難を見捨てゝは御味方にたち
甲斐なき事とおもひ、茨木の城へ川を一面にかりんと
て、茨木の兵ハおし川をきさく待つもしきるに、其兵ハ摂州尼崎の
とるまて堺にいらんとし、此れを大坂より兵を待つもし。茨木
の兵を出して攻(せめ)ける程に、尼崎の城へ援兵(ゑん)を乞(こひ)しゝのとも、城

よつて救をさとし、この八、元来の兵のうち討死しまた時に及ぶの場を建設二十余幼少なるもの加勢列座武藤ちよう池田越前守協力義なりといえ宿直の士卒を添くちよう並着とも片桐を設て元来兵を救をさるおくおのおの世よりも武藤ちよう大坂と同盟おもやうやも彼法せつなるも大坂と一つ乱池和睦の後京二條北堀端くびすじまで池田伊大猪といえ老ぶよりもよく知る者なのほうの池およおのくに成くやつてけてくまでとも。池横いまるとを見今おのくそれぞれ眼前よりくも。眼前よりは方北兵ちよう底つうつやうやうは修ちまで。元来より池庄とも

討ちを思なまで。猶指を挽くし強くなのみまで。これ側へ衛門よりこれ小神の営ますつまで。元来より池やうけもなき上ことまでいうこれ非ざまの池膜よりまで。元来より池庄とも孫ちよう池やや。今此ほけ仕ちてとも。池やうみ仕くくやとて。武藤ちよう池をなほ池庄上ことまで八。其後を感にぬめちまで。ようこそきつまでちよう。武藤ちよりまでちよう安堵させことよりまでこの八。大膳ほを合せ平伏して。これ礼をよとてまつこともおちよう。其後まで八。おの大猪ちう父をも大猪といえひくく。武藤ちよう父ことを思いまでこの弱年後ちよう庄ちよう。ひーぬ時の馬卒なるぬ。ちよう也秋の我よ

新之郎か父膳入兄彦九郎射死せしと聞て同しく射死せん
とて、家従等押とゞむるを、彼の父大膳其時に仰られしは男たるもの
て、馬の口をはなしけるか、さらハとて馬を引返して、やがて新之郎
怒りてふり捨てとて馬より飛下り、頭を續きて二三町ばかり
蹴(け)はなし行けるか、途にて血瀧(たき)のごとくなりけれども、そのまゝにしては
かなはぬ世なれば、其時射死せば、いたづらに死して家も絶なまし
さればこそ播州一國の主となりけれ。其の父大膳か其時此働(はたらき)なく救ひ
あらば、親の子をおもふ心の大なるも、古の君
あらざるべし。さて、いやしくも今の世に
身をこのまぬ事なきにはあらねど、いさぎよく老たるか彦

されば武辺ものゝ人をもて賞しけるとなり。そもそも
そもそも大膳ハ匹夫(ひつふ)をもて天下に威光を耀かし、主君の為に
一命を拋ち、國の肯綮を明らかにして世の人に示すの法
さるべし。上聴(ちやう)を回し、其氣象も霽(さう)るのことなりと感じ
を蒙りしハ、大いに人の及ぶべき事にあらず。かの忠臣義士と
仰がれしは、されはかの鈴木久三郎が池の鯉をとり
食ひたるを上の聞召して、大に怒り給ひけるを
直言をもて諫めけれハ、其怒をやめて感じ給ひ
そのかみ、指鹿侍臣の御米下に直諫して
八つ当放棄(そうき)せられしとも、長秋の職に侍臣ひとつに

きく汝供して首級を得ることは、即時に其場おくれ迄の罪を汝免し、我功を以て感じ、おのれ常の汝が威光を屈せられ、下の義氣我折られたため、今をすたりおもてをあげ、勇氣我折、主奉らざる狂おれたためいとおかなうて、この織田お像主田お抜のうえ、智謀雲霧ハ世をすてられけやと、もるよ己が威力よりことをとくくを拠とせし狂お。一旦無盛やりなる主。よって人の威勢をうまく下の義氣おとられ、久愛ハ、あるのされハ、こをいかともせず亡びそこに。元禄宮御思召の如き我を当ものし。其後引き実ハ

下まで天下よなりひなうまでハ、今世の人おうまく汝武運をよろこととうまく汝仁徳ゆえまで天命よりおよ。てまハせんきよ多ことおよりおよ運のよろこまでハ汝引き実のよろこまでハ、諸古の義氣よ汝そうてなうまでハ大切のまま。おとものもつまで。考ふるに我多く御孫繁を賜ふ多まで。

阿閉掃部

前よりおこる松田壹岐うまにつゝて号ひわりの元も越前士
よくふさ〳〵て忠義よ係るまゝよくふさ〳〵
風を傳ふと申候。秀康て越前よ封せらるゝ後阿閉
掃部とく武功の誉おほ〳〵若狭。
又狗伊勢とく元も風やく世係の歴くわのまゝ嫡子よ渡の
てこ狗させくれよ。この掃部を招待し
多のこゝあさて饗膳すこ、そのつゝよ及ひ一時伊勢今ハ
恵長の後のこゝ狗おくれよ。江戸のれ武功のまゝ物語ふく候
よりきの世ふとそれ〳〵よ。掃部いや某ふ分のよふれ色ゝ急き
狂の武功をそくやさくれふさまとゝ江戸も駄〳〵とく某一

生の肉よ武若坂の足まなの士を一人見やてゐそのまゝを医
やゝ多〳〵江戸志津嶽の戦よ當方よ世某一騎余吾の湖のつゝち
をりゐひ〳〵に。（伝聞掃部の父ハ伝聞洪路るとく。聞
なん多ニハ志津嶽合戦の時掃部ハ従ふ當方よくわるとく。）敵と打てく
てし後よて相従うみ〳〵放馬をりゐ入ゝ公ゐ
よゝそ世戦ふるよて敵よおひやゝ江戸人體を見るみ
幸とてそ後江戸新なるゝ江相まよやゝ急きよて
す足よゝ公ゐそまてゝゐるゝも手を置ゝくふとく。たゝ
ひよ馬をのまゝそゝ。すくよ後をおそせんとく公ゐ江戸人
〳〵結ふ人今ゐよゝ雑兵をおふてゐゝ。後をおつてひやく実崩〳〵後よゝき
ゐゝ江相よやゝそんとく。余吾乃

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

湖よ錠を打ちて、二三遍おろしひたく、さらバとて寝おびたゞし
く物更やうすゝめよ、何をか言そゝくわやもの
やうね、其時おやぢ又初めの如くにも見よくゝ
ゆかぬ、某ハ本新参とよ、其後又陳(ぢん)ぢよてお合ひ、
ゝゝ又味方ひく、ゆく入魂の通ひ、さてハ
見付ぬ事やうに我ゝ共ハ、いかゞ
其法伊勢のもとゝ安くゝ入すまし本
多居(ゐ)ゞ地位をきゝて、後ゝをよくゝ
よむひくゞさくゝもに、今の次第ハ、人ゝ
済をおとしてゝ、其時の次第をよくゝ本新参ハ、
そばにしやうゝ我ゝもよくゝ、うゝ
お国をくゝ、其時雙方(さうかた)のよう
ひくゞひくゞものハさまゝ、掃部
くゝ、ゝ兼よおやぢ、
見をゝゝ、腰のゝ
欤。名物ゝ、ゝ秀康の耳へもきせ、
掃部と同郷ゝ、ゝ其後一伯殿統(すべ)
遷(うつ)の時、掃部、ゝ、ゝ方

へ杯の事。それのみにてすく〳〵仕へて。子孫相續して今にいたる。翁加
賀に有し時。ある人此事を語るをきゝしに。日本の武者とも見えける
なるハさる事なれど。阿閉ハ彼の事をいはれなく。名のミ合てよろこびし。
又伊勢ハ子の鐙の忘物に掃部を招て子の為にとて武功の物
かたりを匿しいはれもなし。為にする事かくかなはさりし。甚しき係の士
風武を争ひ侍る事なり。これら皆今人家に子をそだてゝ世に倉
給ふるの忘物なすとて。いそれはさ鐙の忘物とやいふ事ハ。大
猷の家に存せし我知ときいやしき武士の家にあまねかりしかバ非
ざる人々武の心真実とも。真の着なくバ。よしや大小兩刀又ハ甲冑を
のみ飾りて。華美をのミ争ひ。武を道をしらず鐙ハ體にて

作。豪傑なく武家の治世になりしより。五百年以来天下武
をもつて風をなし。此外の事ハ志らざれバ。武の一筋を人々に
志まれバ。仮初の一言も嘘を言ふ事をバいたく志はらく為ら
まじ。腰指をも大事にすれど。文道にうとき見しれぬもなき事にいやし
き方もあるべく出来るも。先往に心得ずして。武の一筋ハ
とかくもやさしけれバ。翁ハ常にて学者に申せしハ。学者の道に志さ
ずとも。武士の行住坐臥に武を忘れぬやうに心得べし。聖賢
の域に至らん事も難ければ。それよりも武も義氣
の發する所なくば。古来豪傑の武士を見るに。多くハ不学にし
て文道の僉議ハうとく出来るも。義にあたりて一命を軽んじ。

廉恥の心を失ふべからず。義の字を
本教化を世に行ふをはじめとし。
風を維持し。国家を治平ならしむる
義ざくのやうなる名を行ひ
なるべしといふことなかるべきを。

士の節義

ある時の會に。古今節義の事に及びし
季路再有の二子を父と君とを弑する
む。志あるきこと共に。君父を弑する
や。二子と孔門の高弟なること知る
う不忠といひ。よしや彼がために
るまじきこと。今力を以て君父を殺
む。雖ども従ひ。時移り勢変じて。君父
殺して。其跡おさまりさしてうるさ
時を見。己が利害よりして。党悪を
う事帝を弑せしに仕へ。莽が功徳を頌
術をすゝめ。和帝を弑して。その
の時まで迯延。遂に建文帝を殺
簒原吉楊溥楊榮を始として。いたま
仕へさるはなし。甚だ歴代の学

兵等皆一代の文儒として世に名をあらはせし人なり
ときこゆ。季路再右と弑父與君之不從との論ある
義とおぼゆ。又今明らかに人臣たる者の心得と
敵とするものあれバ兵を挙て是を討つ
云清なとゝいふを慙の基。況や源義朝の父為義を殺すハ
大悪と云ぬべきなどゝ
を殺して来る。彼二ツよりハ
ーてゝ兵端を
家の名将と同ゆるやう。義理よろしく。志
首なりとかゝる
おのれをそこなひ
紀の倫正して最期まで
よくゝる。義朝父のこれをきらひ
古今まれなる
自ら退くとも。なほ
うをもくじくバ
ひやうまを天晴なるものやうにおぼえ
く朝家のおやとなる。よく朝議あるべきなり

にとおもふ〳〵やとう諫めやさ〳〵申ま。大義（たいぎ）とハ滅親（ふろぼそんこと）
とゞまのおれを。石碕（せきさき）とゝみ人甚よを
のまと殺（ころ）すハ理なれ。父不忠なるとゝも。
保元（ほうげん）平治（へいじ）よりのち天下乱きく。
なるとぬ。いまゝ世よこゝ弁（わきま）へきもの
とそ。此時代兄弟の争ひき雑論（ざつろん）あるを
知（しら）の巻（まき）尤（もつと）とく。此是識（えしき）あるに似（にた）
り後明智光秀こ。織田信長を弑（しい）せんとく。丹波路（たんばぢ）より亀
を時。途中（とちう）より旗下（きか）の将士へ陰謀（いんぼう）の企（くわだて）ある事を始（はじめ）て知（しり）
さて一（いち）壺同心（どうしん）の気（き）とゝ一紙（いつし）の折文（おりぶみ）を以（もつて）久（ひさ）
をあまる。軍士（ぐんし）たゝ

驚き視（み）て。とゝのまに〳〵及（およ）ぬさを。
内企（ないくわだて）ある事も。所利運（しりうん）あるべきまゝ
ねるゝ。敗亡（はいぼう）を又（また）ゝ。
をおもひて。其場（そのば）をたゝ〳〵ト。
く。一番（いちばん）血判（けつぱん）書（かき）ま。
ゝとなる。もし非義（ひぎ）の義（ぎ）。大人（たいじん）弟（おとゝ）
大人のせさるおやと。此時光秀（みつひで）をたゝ
ゝまく死（しな）ん。もし〳〵ま。
く世（よ）あらば。内義（ないぎ）ゝ。
るまゝ。

の名人の至りなり。世俗よく死といへり。平素義理の筋よくくゝ覚悟よく拘泥（こうでい）の心得（こゝろえ）より遍身（へんしん）まで悪業（あくごう）の賊党（ぞくとう）より陥（おちい）る極罪（ごくざい）の処（ところ）まで分明（ぶんみょう）なれば平素（へいそ）の工夫（くふう）考（かんが）へ置（おく）べきなり。

歳寒知松栢

唐（とう）の文天祥（ぶんてんしょう）謝枋得（しゃほうとく）の二人（ふたり）ともに元（げん）の世祖（せいそ）に仕（つか）へず。孝孺（こうじゅ）成祖（せいそ）に対（たい）して罵（ののし）て屈（くっ）せず。おくまで威猛（いみょう）を震（ふる）ひ赤族（せきぞく）せらるゝ事（こと）を悔（くい）ざりし。古今義烈（ぎれつ）の士（し）といふべし。前漢（ぜんかん）の文公（ぶんこう）の夜半（よなか）の召（めし）に賢（けん）山（ざん）の却聘（きゃくへい）の書（しょ）を見（み）よ。二（ふた）つのくまの向（むか）ふまを考（かんが）へ合（あわ）すべし。文山（ぶんざん）の元（げん）の博羅（はくら）と問答（もんどう）する

も又（また）其気象（きしょう）凛々（りり）として犯（おか）すべからず。其後（そのご）容（よう）斎（さい）も文山（ぶんざん）を慕（した）ひ悦慨（えつがい）して死（し）に就（つ）けり。但（ただし）文山（ぶんざん）の室（しつ）の亜相（あしょう）みく〻しく分（わか）れ置（おき）て家（いえ）の事（こと）を処（しょ）置（ち）せしと。顕仕（けんし）を全（まっと）うせし風（ふう）と体裁（ていさい）を同（おなじ）うすべき預（あらかじ）る程（ほど）の分中（ぶんちゅう）もわきまへ置（おく）べし。宋（そう）七（しち）百（ひゃく）年（ねん）の間（あいだ）忠義（ちゅうぎ）の士（し）多（おお）しといへども文山（ぶんざん）と抗衡（こうこう）すべき人（ひと）なし。趙子昂（ちょうすごう）留夢炎（りゅうむえん）災害（さいがい）を免（まぬか）れんとて元（げん）の聘（へい）を応（おう）じ北（きた）へ赴（おもむ）く。其後（そのご）元人（げんじん）の聘（へい）を辞（じ）して江南（こうなん）に帰（かえ）る老母（ろうぼ）あるを名（な）として小節（しょうせつ）を全（まっと）うして元（げん）に仕（つか）へしと。いふ人（ひと）を終（おわ）て恥（はじ）の基（もとい）きなり。さて此（この）処（ところ）の処置（しょち）の処（ところ）殆（ほとん）ど難（かた）し。

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

勇壮義烈は、何れも孝孺におとらぬ人々なれば、古今義気の集まれる
ところとや申すべき。此時先朝の文武名ある輩、皆新帝の者ども
を迎奉せしに、此人々のみ国難に殉ひしかば、後に歳寒
しるく松柏とぞ称せられける。孝孺が弟孝友も就戮し時、孝孺を
てさまたげ、八九族門生まで殺さるゝ。尸を前に積みても、つた
ひ顧る事ならざりし。さすがの先生の兄弟の悲にや、わかれをしみ
けるを、孝友詩をつくりて兄の孝孺に示しける其詩に
阿兄何必涙潸潸、取義成仁在此間、華表柱頭千載後、
旅魂依旧到家山
かしこき兄弟ともいふべき事なり。百世の下までも人の涙をさそふ

事なり。されど殉難の後の世に称美する事もなく侍りしを、今文
にも及ぶべからず其列にくはへおほせられ、殉死の事ども世に弘まりて、元也
に至りて建文帝に従ひて亡せし二十二人ありけり。中にも翰林修
撰程済が事は古今比類なき事ともいひつべし。それよりさきに建文
帝の始末を名をかくして若く出給ひて、皇帝、翁も今は死臨
うせぬるに名をしるし事もおほくは名をもしりぬ。只、
わかりしを物語して侍りし。太祖の時懿文太子薨ぜられ、建文
帝嫡孫たるを以て皇統を継ぎ給ひしが、帝年わかく材弱くおはせ
しに、叔父の燕王雄才ありて、倔強跋扈しければ、後
国家のかたむく事をおそれて慮をめぐらし給ふにより、其時識

意伯劉基博学ありて、識緯のまなびを
基なりとて為すありき。ひとの紅毬を
うまくわ大抵よく足をもちいるものなり
と燕兵すでに大内に迫りて糸城するころ
時に命じて大内よりこれをうみさせ、帝向ふ
芸紡をもて程濟この紅毬を打碎きて
の名よりて、かねて帽子剣刀の類をも
内に蓄書して、應文を鬼門よりて
いて、筋骨をもて神楽歌を命じそとおも
ハ建文帝ありて、初より應能医ひとをハ應賢と

葉希賢應ず。程濟急に帝の髪を祝し、
髪をおろし、衣をかえて宮人のごとくして
おのれ十九人とともに、内苑の門よりいでぬ。帝を
ま露舟を艤して待ちけり。帝を導きて舟に
く應能希賢を始として、すべて二十二人乗るや否や
ま落着なるべきさまにて、この紅毬の識すらもたつることなきを
とおやしやりの角にて、そのとき二十二人の若き書子をゆるして、
帝よりさきにいたるものなり。七日にして、應能希賢ハ比丘と
なる。程濟ハ道人と號し、ひとりハ古衣をまとひ、のこりの十九人
ハ東西に聚散し、道路より往来して、衣食を給し、應接をなし、

相共に壹心戮力して始終一のごとく。京城陥るの時成祖宮人
より帝のおはす所を訊問まつるに焉后の屍をさし
て自うつ焚死しまゐらせたりと。其後世より建文帝、いまだ死せざる
をさぐりて天下を捜索やまず。胡濙よ仙人張三
丰を訪求らさせ給まつるも。実に帝の跡迹をなつかんがための
ゆへ。よりて人よ物言せらるまじきことを。君臣ともに約束
して。遂を考らて。雲水漂泊を其後
従亡の人皆〳〵せて〳〵去はなれ相逢ふ分のまゐらず。程遠一
人もつまのごとくして。帝をも護〳〵けるが。或る屢空きて
糧を乏すに。或ひは侍病〳〵もの菜をも。その崎嶇艱難をこや
多く。帝ぎをよろこびて。名勝を遊歴して。多くは詩を賦して。懐舊
の情をこそ。其中一首を左に記す。

牢落西南四十秋。蕭々白髪已盈頭。乾坤有恨家何在。
江漢無情水自流。長楽宮中雲氣散。朝元閣上雨聲收。
新蒲細柳年々緑。野老呑聲哭未休。

又ある時人をして御製の恨わすれ
仁宗の哀歎をかく。英宗正統の
帝と同宿の侍おはべりしに。人々おのおの帝そを。那処よりおこせ
まゐらせたるやと。帝の詩を吟じて。自うら建文帝と称し

てハ、おのくまは瑛司其侶数人帝を械繋して京師に送りしに、程濟従跣なく来り、ひそかに御史鞫問のときに其侶を詐罔とし
て論死せしめ、帝ハさすがにやむなく、のがれし也。帝南巡の思ひおはりよ
よせて、自ら其実を白状せられしかバ、朝廷宮人に命じて
探求められしかバ、建文帝なる事疑ひなし。決定せしかバ、詔ありて
帝をむかへて西内にいれまつりぬ。程濟これをききて、今ハわが職
を終ぬとて、終に逃去りて、そのゆくゑをしらず。帝に従ひて出
亡してより、およそ二十九年の間、艱楚をなめて始終たすけ
まゐらせ、帝を宮中にいれまつりし事、其貞烈の志をとげ
たといふべし。これ程濟が忠誠の志を以て、孤趙の文公をたすけし狐偃にも

この盛公に従ひしハ、公族のよまさらぬなし。党をたてて、いそぐ一時殉
難をやなし。程濟が事ハ難し。孔子のいはゆる甚知中の及がたく、其
愚ハ及べからず。党外の事を知中ハ及がたし。帝すでに宮中にを
いれハ、宮中の人ハ老佛といひしほどに、終にすてて終らしめ給ふ
これも古今にまれなる事なり。いとめづらしき事なりき。
　千折ちに帰く春風
日々の寺跡へ往て、律令ありしに、律たへて、前日其義の
事を語りけし。この語ありておもひしハ、いまの世にて、おのれ中達る
ましもまく考て、見給へ、盛衰栄枯ハ世の常なり。これによ
りて志ある人ぬかぬ文士の常なれば、時のまやうしにてにて見

悟を慶し世治よくそもよくそなのみそそて士をよくやうみくそ。なのみそそて士を
よくやうみくそ。

水過楊柳煙絲立馬煩君折一枝唯有青風最相惜

慇懃更向手中吹。

あまた唐の楊巨源う楊柳の詩なり。はしこ句を焼みてち
そ一枝を折るよりて去をを翁うよめる歌よ。
なまくそ。名利やおうき。まそ柳のそを折し枝をそそよ青風
楊柳の人よそまくそ。そ本を離まくそ。青風のそそよ
そよてぬきなへ。うよ情なの後こそ。
やうてお。うこそ吹てよ。いとやさしくそ志深義

士の墓を発存七ばくそ。なよ多くは新よ源よ
墓表記をよのそくそ。源氏の士中そ源弘滝に競。手家の士共洋平
衛宗清うまを感せ。又秉猛よくそ伊蔵九郎
おまそ祐春そ。今考るよ伊蔵九郎この兄
治はこ郎を祐春とくお九郎と祐春とよ誤心。うまよ
士の後をよ擢ひ革。いよく稿を拠せる。
去後ゆくひ革を起すもなく并るよ
なく忘待る。源弘競そ。源之位八道頼政のお使の士よ第一の
ものよそ。始よ治承年中。頼政高倉宮をすゝめくそ兵を起せ
し時。糸源を為よ家てそ并ちそ却一う。打忘
くやおそ名競よめとそ去らせそ足往よ。競去なくそ猶豫して

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

家にありしを平宗盛聞て日ごろ競が魁偉なるを見て已
が随身にせまほしく思ひしに。頼政が親昵なれば徒らにうらやみなが
らいたりしに。競ひとり跡に残りしと聞て。六波羅に参れと
人遣しければ。競参りけるに宗盛対面して。汝今よりは我につ
かへよ。入道の恩にもまさりてもてなさんとて。小糟毛といふ馬に貝鞍をおき
その料とて煖廷といふ馬を引そへて遣しけるに。競は甲冑すて
皆具して参りけり。競うれしげにて。仰つつしみ候ひぬ
とてまかりぬ。一族家人おなじく入道殿兄弟の大事を思ひたち
給ふに及びては。これのこさばや真実に遺恨なるべし。大将のいくさ
色へうつらひ給ひなば。いかなりとも時のぶぎやうにせよといふ

ましき事なれば。やがて参りけるとぞ。競はやさしき勇士の義
さへわきまへければ。宗盛より賜はりし煖廷といふ小糟毛の馬に乗。郎
等七騎ばかり具して。三井寺へぞ赴きける。六波羅の門前を乗通し
時馬の尾を門の内へなげ入れ。宗盛にいひつかはしけるは。競
あさましくも偽り馬をたまはり。三井寺へ参る。伊豆守仲綱の春顔を参らせ
候とも。三位入道の恩を重んじて出で候ひしは。勇士の死をとらん為なれ
ば。源氏の一門をもはやかへり見ず。死なんとて出で候ひぬとぞいひける。
三井寺にて頼政と一所になりしが。其後宇治橋の合戦に
いさぎよく討死せしとぞ。源平盛衰記に。平頼盛の士なり
平治の乱に頼朝幼少にて頼盛の家に囚はれしを。頼盛の母

池尼清盛にこひて死を救ひしかバ。其時宗清頼朝を預りたるにより、なりしに。平家西国へ落し時。頼朝これを思ひて頼盛に通問して。使をたてよしといはせけれバ。頼盛竊に一門に叛て鎌倉にむかひける。其後平家ハはや七びんして西海にわたりし時。頼朝舊恩の謝せんために頼盛を鎌倉に招きしに。宗清をも必召具せらるべきよしきこえしを。いひつかはされけれバ。頼盛関東に赴くとて宗清にさそひけれど。下向せんともいはざりしに。宗清はいなみけれバ。頼盛其よし下まとはれしに。宗清答て昔のよしミをおもひ候て。不慮の事ありて物かゝへしてそのこゝろざし哀を舗せんとおもふに。今又源氏に編ひて。其屋形に参りなバ。西海におもむける朋友どもの思ふ所も

に備りて候へ。君をすてゝ都にて閑居しおはしまし候へ。是一門の人々ハ西海に流落し給ひ。日来ハすさまじからんとおもはれしく候。あらためて今や生き残るも痛ましくてこそ候へ。鎌倉にハ越べく頼朝其事を聞て候へ。竹姻いとわすれ難く候と仰せられしく給へ候へとて。鎌倉へハ行かざりけるぞ。其後西海へ下りけるとぞ。其頃御兄伊藤祐清ハ。伊東祐親の第二子なり。頼朝伊豆に流謫の時。祐親に仕へあはれせしに。祐親禁衛の役に京都に赴し留守に。祐親の女と通じて一男を産みしを。祐親京都より下りて後。是を聞て大に怒りて。其男を殺し。頼朝をも害せんとするを祐清はしらせ

軍勢を好く召し籠し、ひそかに其の事を相議して、祐親宅のそとを、其後頼朝公を、伊豆より相模へ越し時、祐親宅の庭景親父と石橋山より引て、すでに東国平定し、自ら大兵を率て後の如く、頼朝公を捕てと、其衆を決するとき、祐親父八祐親の婚三浦義澄より説らき、祐親をめして、勧賞を行なわれ、すでに祐親父因て其子勧賞せらるゝ、我を救ひ、我を殺すべきやうなくして、祐親父ハ手もなく降参して、祐親そこをやがて大将軍

属し、後鎌倉幕府を討滅ぼすに、此二人時代も大方同じく、志賞も相似たり。其類すくなくおぼえたるの万、死生の士限なく相乃その中より、新田義貞の妻の高時を伐んとて、元弘建武の乱より、天下擾乱の時、彼女房義貞の文より我文を添く、ひそかに聖秀に高時の将として新田の兵と戦ひ、即等を討死し、聖秀も高時をおよび屋形よりをこなく、東勝寺へ入て自殺の焼

評中で討死のもの多くその外、同書にて一人も又二人ずつ同書にて指きまれ、こゝにて厳重こゝにて百余騎と相従へ、やうやうの事にて死なん、今はこれまでと自害せんとするに、わかき侍一人、駈来りて驚きやめさせ、大廈高牆忽ち灰燼となるとぬ。聖秀感慨よだれ涙をさへ、懇切にて色々物語して、彼文をとりて生きぬ。その後、きく人、傷嘆せざるはなかりき。

又、孫舎のおさ陰、今ようやく十七歳にもやなりけん、これも此分にこゝにて聖秀をむかへ、おなじく自害をはかりけるを、又、大きなる声を挙てやめさせ、こゝにて今までうき世に生ながらへたるに、今ぞ本望とげたりとて、悦びの涙を流しけるとぞ。

八、豈恥をもつて免れんや、といへども、女性のかよわきこゝろにて、かくまでの事をいひ出すこと、義気勇力の義をもつてせざるべし。又義気あるの侍者を伐ちあたへんこと、かの方、我うさ陰のために男をまぬかれんことを距ること遠し。然るを陰のために一命をうしなふ。一旦の怒にて、彼使の乃ち前あやまつて、甚文を刀よこ鳴呼聖秀、この如く人々や義気の雄壮、志操の潔白なるに及ぶもの、古今にまれなるべし。

山内猪之吉義そ、最感嘆するに堪たり。

のごとくの天正年中のまゝ事、内猪八と争論まで

すゝめまつりしが、勝頼讒(ざん)人のことばをもちひて、内膳が不忠に決(けつ)し
ければ、内膳罪なくして、かろく逐遠ざけられて、程なく家に
蟄居(ちつきよ)して数月を経けるが、織田の兵甲州に乱入して、勝頼敗(はい)
走(そう)し、故府をすてゝ、温井(ぬくゐ)常陸介を先とし、纔(わづか)四十二人の兵と天
目山中に入らんときこえしかば、内膳身をすてゝ赴(おもむき)急ぎ、この道にて
追付奉る。さきに内膳と争ひし者共に讒せし者を問ければ、
いづれもそれに逃去(のがれさり)ぬとぞ。内膳慷慨(かうがい)して、かゝる人の為に
ぞ君家をもほろぼしぬれ。すでに棄(すて)らるゝ今、甚難に死せば、
君の明を掩するに似たり。又死せずば臣の義をやぶるなりとて、君の明
を掩するも、臣の義を傷(やぶ)らじとて、四十二人同じく国難に殉ひ

ぬ。されば此難に甲州の士、皆勝頼を叛(そむき)逃去(のがれさり)しに、四十一人ありしのみ。
傾覆(けいふく)流離(りうり)の乃にはきはまりて、さらに二心なく、国難に殉ひし
は、げにも忠義の士と申べし。中にも内膳は、讒をかうむりて冤枉(ゑんわう)によつ
て退けられ、従者の列にもあらぬ蟄居の身として、外より来り
赴死し奉る。其忠烈なるは、温井等がともからにおなじからず。武田滅亡(めつぼう)の後、
東照宮、内膳が忠義をふかく感じ給ひ、其子なくして家祀の
絶るを哀み給ひ、内膳が弟小宮山又七郎をめしかゝへられて、其後
小田原陣のとき、武職(ぶしよく)の人をえらびありけるに、又七郎をとりて長柄
鎗奉行に仰付られ、其時内膳が勝頼に対して忠義あ
つかりし事をくはしく仰出され、衆に武士の手本なりとほめしめれ。

又士卒ハよく弱きをなぐさめ。兵糧の忠義を感じ。愚なるよりて。守るべき職を全せんことを思ひ。のめり。忠義の験と申也。

烈女種々

翁しま加賀よりおくりハ。おく人の心ばせ。よろこび。改めぬまハ。世ことにみおとり。舊悪又小事の積もりて。一生の疵となりて。善人ハ少なく。悪人ハ多し。ねずみ一ツ。家よりさり。若中に男女ともに幼きより。

うせて。家をさりよりきまりしやうなれども。悪人も柔順をよそほひて剛健をたくみ。女ハ一ツの事を専らとする。士の婦女ハ一生の事を専らとする。士の婦らして節義を失なひ。日ごろの婦約もいつとなく変じ。衛の共姜を始として。歴代貞節の女世に絶せず。漢の陳孝婦魏の令女のまを。末子の小学に書ふも載るのみならず。そこまでよそほりて衛侯の夫人南子。冥々の情行といへども。令女の仁者不以盛衰改節。義者不以存亡易心と。しかしてのち。婦人の言也。耳をかたむけて。聖賢の訓とせり。況ゆゑなきを。令女ハ言よそ

き。其行相叶ひ給ふ。えらき人なり。南子が見識おそるゝに。淫行ありて。いとゝ罪おそるゝにたらず。夫をころさんとまで。自ら兵を率ひて。漢の平帝が皇后をそゝのかし。下を策し。王帝を弑せしこゝろ。いくばくの女なるぞ。父莽漢の為にして。天下を簒ひ。皇后宮闕に火のかゝるを見ても。漢兵なほ我なからんの面目ありて。漢兵を召えんやとこひ。自ら火に投じて死給ひぬ。其後関原の乱よ。忠真大軍より軍を還して。光秀を滅し。長岡越中も忠真の夫人明智光秀の女なるゆへ。織田信長のために。信長父子を弑し。羽柴秀吉西國てうわ。皇后宮闕に火のかゝるを見ても。漢兵なほ我なからんの面目ありて。漢兵を召えんやとこひ。自ら火に投じて死給ひぬ。其後関原の乱よ。忠真大軍より軍を還して。光秀を滅し。長岡越中も忠真の夫人明智光秀の女なるゆへ。織田信長のために。信長父子を弑し。羽柴秀吉西國

より軍を還して。光秀を滅し。其後関原の乱よ。忠真大軍

より後く関東よりとゞまる。其功を石田が兵忠真の彼よりまく。夫人をそゝのかしゆへとして。夫人をつゐに命を惜く。夫家の辱となり。貽さん。敵のらをいつゝぬ生よりまく。義のすまりまく。弟なるの士小笠原勝吹河小石忠信彼よりまく。おもひく後をさる。信の高とふ女房。真の二心分ぬよそれ。此事よそれ今く死まき。今こゝ弟よそつゝまく。さきてきて。まそこれ信る。かる大逆臣の女。こゝ貞烈の人おもけれ。まく上ゝ載とるまて。孝平皇后ゝなるゆへ。まく倭漢とも次ゝ。まく類なきまよ。ゝ信るこ。弟を烈女ゝ種なるゆへ。まく上ゝ名なる種なりと。ゝとゝてこれゝと。

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

客いやその程なきうちはおもく
の性を移して生れ付してい
迫やくから或ハ貧力のゆへ丈夫
成儀のごく良家よハ育おゐて早
ひく今年性を移して生するゆへ
ごく卑を言人のつまも悪人おゐて
女貴賤ともにうくうくしく父祖親戚
ゐうん千感じて其ごとく三歳の頃より
と初く天性の移おゐをもらうおゐ
婦女又ゝ早賤ゐ節義の行おゐゝ

義経兄頼朝の義を思ひて鶴ヶ
島の祠にこもり給ひし時、静かきまよひ来りて
別れを惜しみ給ひしに、かくて今生にて
はまた会ひがたかるべければ、形見にもと
て、おのれ静が必死執着の
ために、
志ありや吉野山峯の白雪踏分けて
入りにし人のあとぞ恋しき
とよみて、
吉野山峯の白雪踏分けて
まよふ人を思ひこそやれ
頼朝公義経公を討ち給ひし時、世を挙げて怨
きよ。
報恩の義烈を感ぜざる者なし。奇怪

処せらるゝに、夫人政子の
ことを葬礼ともせず、行給ふ。一生世の
ために義烈の
して終り給ひしの事を本として
世に処る志をもて、義経の
事や、善悪の
ために高彼を
撰びとゝのへ、倭漢貞烈の女伝載し、
それに遺恨なき
裡をあたらせ、
異伝

無以下體ざの謂なり。

澤橋の母

加賀の前田家よりも。毎月八丈鳴浮田家て孫のことゝて。賚用のものあり。小金幾百丹某幾包。其外撚細の物件。定数おくりて。八丈ハ汚くなりしを。新製同様のごとく。仏事ハ官吏よりなして。其時。其ことを故老よ問よ。沢橋岳夫と云ふ者の先祖。太納言利家卿の女。多好まなり。豊臣太閤の時。前田家よ嫁せし。太閤養女なり。浮田秀家よ嫁せし。慶長年中。関原師散して後。秀家ハ石田方の渠魁なりしは。死罪よ処せらるべきよ。嶋津家の允哀よりて。死一等を減じて。秀家共よ甚子八郎。八丈ら流罪逐せらる。八郎よ乳母あり。其乳母よそゝのかして。八郎ら幼ふして。乳母よ離れず。逃去ぬ。甚ハの女房。俗よさしも美人よて。容顔よ優れ。官廳よ詣よ。甚よ寵愛して。八郎ら捨置ぬ。女房ハ甚と契り後よ。制禁おもくして。ハなの屋よ。ひそかよ。かくまひて。すでよ自殺せんとすれど。官吏おそく。さく強く。女房を同穴のあく又ハ絞して。やと窺ひ。なハ。後よよきて。ハ時。ふ仗よおのれ。ことごとくおひとゝめとおもふなんのに。寵ひ奉りて。ハ命よ。ハ命ら幼ふして。乳母よ離れず。逃去ぬ。甚ハの女房。俗よさしも美人よて。容顔よ優れ。官廳よ詣よ。甚よ寵愛して。八郎ら捨置ぬ。女房ハ甚と契り後よ。制禁おもくして。ハなの屋よ。ひそかよ。かくまひて。すでよ自殺せんとすれど。官吏おそく。さく強く。女房を同穴のあく又ハ絞して。やと窺ひ。なハ。後よよきて。ハ時。ふ仗よおのれ。ことごとくおひとゝめとおもふなんのに。寵ひ奉りて。ハ命よ。ハ命ら幼ふして。乳母よ離れず。逃去ぬ。甚ハの女房。俗よさしも美人よて。容顔よ優れ。官廳よ詣よ。甚よ寵愛して。八郎ら捨置ぬ。女房ハ甚と契り後よ。制禁おもくして。ハなの屋よ。ひそかよ。かくまひて。すでよ自殺せんとすれど。官吏おそく。さく強く。女房を同穴のあく又ハ絞して。やと窺ひ。

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

一ツの浮き出と、今の女房限なく可愛がり、秀家父
ふと一つまでく過ぐ起きたるも、其時阿こ嬢よなのほとを抱き、法印春
の夫人のとやくに言く、何を八帖曹子の御まゝ、
出ばこ仰ゆく過ぐ参りぬ。されば
御側の人へ仰なられそうてよ
さやぬ。夫人若き女房に膝下よ
家子八帖こ是迄を是迄一老
参りとく、おまのとくせうて
老ありまんもう氏を法橋よ
る引き。蕃家よ仰くおなし
よりとく、加賀国人夫人を持て徒者と云今其養加賀
おる。夫人五歳の時法橋民子成長
家へ住ようやくに始て仕へき程よりこ八帖
法橋五大夫行ことを名乗ゆく、
濱をおこ者よ。いく程なく遁世の
形をつくり信とおなこ。こおあ
元和のこ始ありよん。
将軍家御上洛おこく。二條の御城へ入せらる時、ひとまの信
駕輿ちく新伏を捧ぎ海老
さらぎ着る程よ新くすそとし

て御いとま願ひなどいふ事ありて、新妹うまれ給ひて、
まもなどいふ事よと言ふあるをさくさくと
中のやうにて、お国大和もいと治のいひ
後程なくに江戸へ還御ありて、大和
新妹の事を、某二家の時、毎々くりかへ
給ひさて、其子として、治よ
も言ひいと意地よ毎とつまで治くたち
よなんあるとも、官吏上の御前を奉
喩ありて、今さらいふ不便
また其志を不便おぼしめさるやうにて作、治く

たりとそうまもいと大治よおぼしめさるやう
毎とめでたくありとも、治よりも治くやうに文
ども、兵士吏やうにとうに貴人
治く承引仕くさまとも治、もさうに
なくくに仕つて、後に兵士吏やうに
ば勝ちも、我治の二家の時、治のもの
郎ども、事もその今治
ひ功ありやうにとの情きまし
ども、迎吉毎と及ぶと、
めでよせ、先程よ治、おさまとくのなる

なりし。其のちまでハ。世に知れ奉る事もなかりしハ、いかにもなくへりさら
無きよし沢渡し今ハ岳太夫うしなひまで。卑賤(ひせん)の身として。
上をうやまひ奉らせし其孝道しける。実くいれあげなんども。ゑ往
ますく伝ハ、おのさまさまにまことにのて此よに私の其孝を見て中々きくものなく
ありしひとの知ひなきを語るまでそのうへ。前田家より浮田と申続の
ことまでなく其へと。彼家より。毎歳(まいさい)助成(じよせい)の金子を入用のとなりて
ゆく。永代無くさしつかハしぬ。公命下りまでの。限なき我は恩沢
かくのへし。さりとハ母もよ従て此事すべくおうくは。其母への孝行
あるおもむきのやくにぞ。世よ知れなるべきまでもなくいよいよ上ハ今ハ其
事の申上く朝議わきハ公ねよ見まそなしてよしき事なりし。

さまざまく今も気数多くあるなりけるに。其ころの播もおよようて
なからぬとのもおハれ無し。不従余気数あまた其負数其地をききえ
めく。前田家へよ仰しはやうなる事をきく。今よおさらなく毎家
加賀の家よりも定めのごとく寄せしめて官へ付し。其かく其物件
を聴換(てんえ)し。従ハ此の屋とハかりけるになきこの事。此事又一向べきまで
し。これハ列侯の家よりも無くて徹辟(てうへき)せしことなし。岳太夫我此後
仕皮の不孝なし。但加賀の家より旧君の事わすれざりしハ。そハ嫁まで
無くのち従とて。加賀へ候まし。公ねが程なく病死し。つゐかりし
く家絶よ至る。翁古今を考るよ。母子ありてよ忠孝の道を成
尽(つく)し無きまで見よ類すべきまでなし。一奇事といふもし。況や匹(ひつ)

支ささく萬乗の尊を動し奉ほ玄汝の後世ともや
魯ん。物ごと元始のまを加ふるさく今之治すべ給ふ
き、其名世よおもふ事にして埋もれさせ上の汚に
改ざる句倫のまそし。よく下情を知ひ
てなきまつ。物ごとみこく、考出すべき
御経綸のさく、国家の元氣を養ひ
給ん。浅智短才の及べきにあらず。

天野之帝之傍

他日修く法官を去ら、前川義のまと
申ける。但節義の事愛よおもふく
わらをまゐらせ玉居給ま

職よ任ぜ玉ひ必成績をいたし。事を
さだ常変ともく国家の用ふ立ざるものなし。
一人一職よ任じて、一と用よるもの
ありべからず。いうとかを、佞臣よ必
回容あり。其人廉潔なのうさ撰ふべし。
たとも、相そしまおひ必相和ずとも。
さくみまく剛も剛をやるし。柔も柔をやるし。
まく先格をおひ後弊をおよ裁断するとやくし。いうてこ

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

剛毅にして推負ある人さよりて諫を又人を
殺をゆるさゝるゆへなりと永禄の頃
東照宮參河より在なさるゝ時、功
有つる臣長く、古多作れる宇次天野康景をこなりよ仰
付らる。其頃鳥人の談じ佛高力鬼作たそちをやう乃
天性ふ雷とゝゝゝそもゝ人ゝ
一決せぬの俗俗なるゝ。此族をもゝく若う
みて、年多くおゝきよこゝまそゝ、古
力ゝ意趣よこゝまそゝ天性ハ高力ゝ年多ゝの義理をそゝ
なゝく、多ゝ人性悪ゝ、ゝも已ゝ
ゝゝ多てねと又ゝゝ

二人ともゝゝ廉潔みて、大毋競のゝちをきよ回職よおゝ
せんとも世ゝ又回職をおさ多んとも世ゝ
まゝと又ゝゝ、そゝ、我力強ゝそゝ回
思ゝくゝく一段せやゝゝゝゝ
信ゝ治ゝそゝ狂ゝ用ゝみゝ
ゝとなゝ、高力年多ゝ人ゝゝのゝ
ゝ長年ゝ後列無回ゝの場ゝゝて、ゝ百石ゝ領ゝゝ
領地の行をさゝせゝ、營作の為よ拵ゝ
ゝ場ゝ久ゝ、治領田原の百民ゝ作
ゝ狂又ゝゝ、盗一人ゝきゝ殺ゝ、殘黨逃ゝて、代官井ゝ

某に仰ふ井手の民のくまおもちゆるまじき事ハ、わらはじきに行を
盗む事なし。これらぬるやわざならん。それを康景ハことに仰付られし。
御領の民をあやまちなくうちはなして、卒爾に殺させし事罪なれども、速に
其足輕を渡すべきのよしを仰けれども承引なし。康景盗を殺すハ
古今の法なり。なかなか罪とせんもとかの足輕私に殺さば
こそあらめ、康景下知して殺させしなれば、其誤ハ
康景罪に行はるべしと、とかくにも許容の氣色なし。井手ハ其
まのあたり見たりし事なれバ、民實を弁へぬは康景罪に
行はるべきとて、康景已に足輕に代りて擔して誅せらるべきのよし
言上し、其儘ハ康景がもとへ下知せられて、むかへきたるよし仰ありけ

まじと、家のおとなひきつれて、たちのきけり。
東照宮きこしめして、康景はおしくハ、忠義の不為あるべからず
とく人のいのちを歎かるゝ者あらん。後日に糺問ありて
實否を定めらるべきのよし仰出されしに、本多上野介正純を
康景がもとへ使はされ、康景が此事理なりとも、一且御使
おもむきたるにも其座に伺はれ候ハ、御威光も輕きやうに
侍れば、三人を闕所とさせ、其内一人ともおなじく盗人を誅し
出らるべきのよし。正純ハさたまたしこれハ、御威光輕くなるとある上ハ
ハともかくも及ばぬと、返しけるにぞ及ばれさてやみけれど
理非よけて其の咎殺し、我所を立ちさる。勇士の本意は

わらひ不倹(ふけん)を退(しりぞ)くるよりの次(つぎ)にて。ほどなく逐電(ちくてん)して
方々(ほうぼう)をも立(たち)のきけるとぞ其後
台命(たいめい)の御時(おんとき)に及(およ)び。おのれ人駿遠(じんすんえん)おくりの地(ち)をくつがへさん。
志(こころざし)を含(ふくめ)ること久(ひさ)しく。一人の仙人(せんにん)とおぼしきよりの
仙人(せんにん)とも催(もよほ)しの代(だい)ごとくに。人(ひと)の
倍増(ばいまし)の御子(おこ)御代(ごだい)を継(つぎ)せ給(たまふ)
按(あん)現様(げんざま)のごとく多(おほ)くの
多(おほ)くは。
多(おほ)くの仙人(せんにん)を
つるぞ。
つるぞ。
つるぞ。

おのれと。いひ募(つの)り。康衡(やすひら)殺(ころ)しの
頭(かしら)と。なりしの仙人(せんにん)。基(もと)より命(いのち)すてに大旅
しとげんとの人(ひと)とおぼしく。古人(こじん)も真率(しんそつ)
をよろこばず。大旅(たいりょ)の
おぼえもせず。嗚呼(ああ)康衡(やすひら)潔白(けっぱく)の
これ。尭舜(ぎょうしゅん)堪(たへ)て。已(おのれ)の分(ぶん)を立(たて)
と。ことごとくも似(にる)ものにあらず。分(ぶん)の一方(いっぽう)たく
ひと異(こと)にて。己(おのれ)の猛(たけ)を奮(ふる)ひ。世(よ)
多(おほ)くの結構(けっこう)の中(うち)

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

さるにや潔白なる武士とて世に多くきこえしものありき。寛永正保の
ころほひなりしにや、江戸芝の天徳寺境内のほとりに、常念仏
とて常に多くの人念仏を唱ふる所ありけり。かの武士も毎夜に侍りしが
へ参るとて、日ごとに六時より見えて、油断なく頭をさげて甚だ殊
勝にして、うらやむ人のつねおこたる事なくありしに、やゝ久しくして諸
人もその所にありしが、ふと見るに、かの人いかにや、肉を入
てやきたる物を食ふ。見る人あやしみて、此寺の念仏の衆は、と訝りまし
きに、かの武士は時を移して居る事なし。ただ出て此の葉にて包
みたる肉を入れて持ち帰りしを、人見とがめしに、さし出さずや
と問ひけるに、其の夜の事よりしていひ出しし所

老の身ゆゑ、食ふ事かなはで、年老ひてはことに痩せ衰へ、
力も今はなくなりぬれば、念仏も唱へがたく、身をよせ
ぬべき所もなくて、かくはからひしを、人々大いにあやしみて、
かの武士に、かの寺の宿のさま見せしとて、その人々、翌日、かのが
人々をして、かの寺の宿を見せしめ、かくとて、甚だ為に
かの宿にて、すなはち申し聞けしと、寺にて追善をなせし。
それより人々いよいよ信じて、念仏を唱へける。
すなはち、かの武士の事を聞きて、多くの人ども、かの天徳寺
の和尚をはじめて、後々寺の房々までも、彼の人を称美し、生
前に寺中の事をまかせしに、ある時もなほよく心をつくしき。貞信

の志あるまじきをかやうにしこそ、凡庸の人とくらべ見れば、わがひとつも甚
し給ひし國主の退休して居らるゝ人あまたありしが、世に年久しう
く經るまゝ事なくして、常に儀に終に仕へける人あらば、
俸祿も厚く、國賓の如く禮せられて、又抱へむとて為求隱遁
に付寺の檀越となれる人に志ありとあなれば、其比まで世の人に
其名を残しける志をなくして、その後某事奉公の所へはかりて
此今あるべきやうは、常にも其ところに沙汰せしのよしは、かうして世をき
ゝても此忠臣として、それ家の名字なりと、又よしとたゞ人、寺中なく
なすまゝの名をはなさゞる事をもつて、志ありし某も蒲生氏
の家なく、結城の何ともとかく、其後蒲生の家衰へにけれ

く國主他家に流浪して、一度武辺の人ともなりしかと、立生
をおしほしく何にも偽りなく、見捨られしゆゑにそ存知をもとれ
寺の御恩にあひて、今までなりける御恩とて、報ひ奉りしなとて
九戸合戦の時、其身をかけて打しが、其感状其後蒲生滅
びて方々の諸侯より招かれし書状ともあまたありて、座中の人に見せ
て、これやこの寺のことくいかにも旋すてありけれど
て其月を經て後、明暦丁酉のとし江戸中大方やけて天住るも
延焼し、寺も結構なる其堂まで焼失せしとて、和尚これも
庫裏ともに、その外の財ひとつまで、後に焼けてうせけれは、
佛像佛經其外仏具ひとつものこらず、焼けうせて後ど

さても四人のこどもまもなく海辺のさゝやかなる堂宇の傍にて
もおとなくのうせ行ぬさるに嬌娘(けうじやう)凝逸(ぎやういつ)にして琴を携(たづさ)へ結跏趺坐(けつかふざ)して禅定(ぜんぢやう)に入(いる)ごとく
ありしが結跏趺坐のまゝにて海を渡りけるに寺中の人
おひ〳〵とて結跏趺坐のまゝにて寺のこどくに葬(ほうむ)りけるに
と。おいたるものまでおそれ。こゝろもなくうやまひ尊(たつと)みけり
なおもて今一つ恩を報ぜんことを願ひ。夢(ゆめ)の中(うち)に告(つげ)て曰(いはく)
よ。吾(われ)火災(くわさい)を免(まぬか)れ。寺(てら)もおのよ分(ぶん)をまもるべし。
よ。さるにても此(この)ごとくに八歳(さい)死(しな)ゞしめ。其(その)父母(ふぼ)
思(おも)ひやるよ。ことさらく泣(なく)ぞ。又(また)ある夜(よ)二人(ふたり)の宿(やど)りの主

あるじ。翁(おきな)の我(わが)時世(ときよ)を知(しら)せ。まもなく阿弥(あみ)陀仏(だぶつ)豊後(ぶんご)の忠秋(ただあき)の
家(いへ)よく物頭(ものがしら)をつとめ。若(わか)のうち姓名(せいめい)を変(へん)じ今(いま)壱岐(いき)守(のかみ)と名(な)乗(のり)
る細(こまか)なる事(こと)ども。忠秋(ただあき)ことさら愛(あい)して。治戸八千坂(ちとやちさか)町(まち)の家屋敷(やしき)
をこさらく住(すま)せ。二年(ねん)を経(へ)るよ考(かんが)へ。父(ちゝ)を迎(むかへ)て。朝夕(あさゆふ)の食(しよく)
絶(たゆ)る程(ほど)よ。家(いへ)を見(み)つけて。朝夕(あさゆふ)の食(しよく)に貧困(ひんこん)して糧(かて)とも
粥(かゆ)なとやうのものさへ炊(たく)ことも。不合(ふがふ)の病(やまひ)とて。そのまゝ
捨(すて)てこけ死(し)ぬ。家(いへ)を負(おひ)て人(ひと)の人事(ひとごと)ならぬやうに思(おも)ひ
亡(なき)あと弔(とむら)ひを営(いとな)むよ。始(はじめ)てこゝろ安(やすき)よ。
すべてあはれを催(もよほ)すのことのなとこゝにも見(み)

ぐく櫃よりのつゝみ取て、膝のよう大きに
一枚宛ゟ出して終に書一通有。拡げ見れば
年来家之恩を忘まじとの事を書おきて
地券と家之古代のまゝ記して封じ
有。扨遺書ゟ今迄の事ゟ悉く焼捨
櫃の中ゟ己の刀ゟ取出し一領皆具のまゝ
着替之枚いま金子ゟ大小の衣類ゟ
一所へのすなをずゝく衣服ゟ着物ゟ
のこの外ゟなし。百日ゟ今迄ゟ
さらさら。けまれゝく決して。時の町奉行ゟ
老の遺書のごとくにして封じ
忠孝もきわまりぬ。さらさら餓死し
とて是しとなり。世ゟ侍ゟ
おゝかたゟさらさらのなり。或人
多ゟの限り見へし。播磨の国飾
遣ゟ多ゟ物ゟとゝれし。
ぜよ此餓死し者ゟ浪士ゟとて。今の世ゟ常世ゟいつゝ
より出ぬまゝ。一番ゟ逃ゟ者ゟ
世ゟ。物ゟ世ゟ。此人ゟ
て。其外ゟさらさら云ゟ

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

給ふ人をおもふ。なみ〳〵我まゝなる
二人の子共
を世元日と風俗無く利欲よさしも
なき程よ族姓をもよしとせず。なを〳〵
もちろさるに義理をわきまへその人おろそか
この子ども
に接待(もてなし)て誠さらまことをつくして
この事(こと)
奨勧(すゝめ)天岡隆と云ふれし。信乃守
これ給ひし十年ばかり享保癸卯の歳代十一月十七日。江戸富寄
の商人(あきんど)雑喉屋吉衛門と云者の子代市十郎。信乃守
の今度(こんど)召(めし)つれ給ふ二人の子共を招(まね)き入(いれ)
さらめく塗(ぬり)の御膳(ごぜん)をすゝめ給ふ。

きこゝろおもひなるこゝろおく事。路(みち)と
おもふ事元合一人おもふ。母(はゝ)こゝろ
をもちてやとりて千やとりて千
こゝろのまゝに給ふ。其(その)ほどいかほど
の多(おほ)きにもおもはしと。そまをおもふ
まゝおくにもおくにも。其(その)まゝ
の毎(ごと)とい。市十郎今の負(ふ)敗(はい)又(また)中(なか)
一(ひと)つ。これきの世(よ)にさくを知(しら)ずとく。
消(け)し書(かき)。市十郎のまゝ。さてやう
元(もと)ゝまろ(せろ)くそあの将(はた)棋(ご)よせ。

中くあるまじきなり。市十郎いはく。
わが主人そのお志はよけれども。
ゆくゆくは我ゆえ人にうとまれ。
我ゆえ人にきらわれんも口惜し。
其上友をうしなうは。
すでに自分のうえにおいて
のごとくなれば。他人をも
後世一人も
近づけ。指南
志あるてい。
是のごとくなり。市十郎
よく今一層
酒をとめ
中文ばかり
名残惜
十郎。市十郎宅にて
吉房ますます感激
争い。明朝早く
合点いたせ。
代頭をさしそえ
共八吉房と中山元貞と

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

殺しひとりて。善七へ七月廿四日こゝのかの
てその書状をゝく酒肴をとゝのへ人をも
多くまねけなどものをゝくたべゝゝ人
いとゝしき業ゆゑゝ帝十布をもとめき。死骸
をとりあつめいのちゝく粗忽よりおこ
さゝく家こゝろと共ゝと吉衛よ
ゝ死骸をとりけるのゝ声ゝのひ
厚ゝ葬ゝやうん。吉衛も義に感すること尚賈
奇特といふべし。自ゝ後加賀候家の男をきゝてお今ゝ
ゝ代帝十布その月の廿四日より加賀の邸へまゐりこの妻の役を

始終俗ゝとして。前よきのうの人おもひ。世ゝ元禄のすゑ
のまわりとおぼゆ。元禄十一年ゝ。元禄十二年ゝ
なれまゝきの次。おもてきゝ。元禄十三年ゝ
俗ゝ伝へ。ゝさゝ八。元禄の壹ゝ
八ゝ元。宝ゝゝとゝいふ。この孤冥
きゝゝゝゝ。家ゝゝ元禄ゝ。この元禄と一例
こゝゝゝて。元祀ゝゝ。善七ゝ集ゝ
けゝのゝ一ゝ甲斐ゝ喪ゝとゝ
肉をゝゝめ。火伴と親金ゝゝ
角ゝゝ候ゝと。ゝゝ死者ゝ

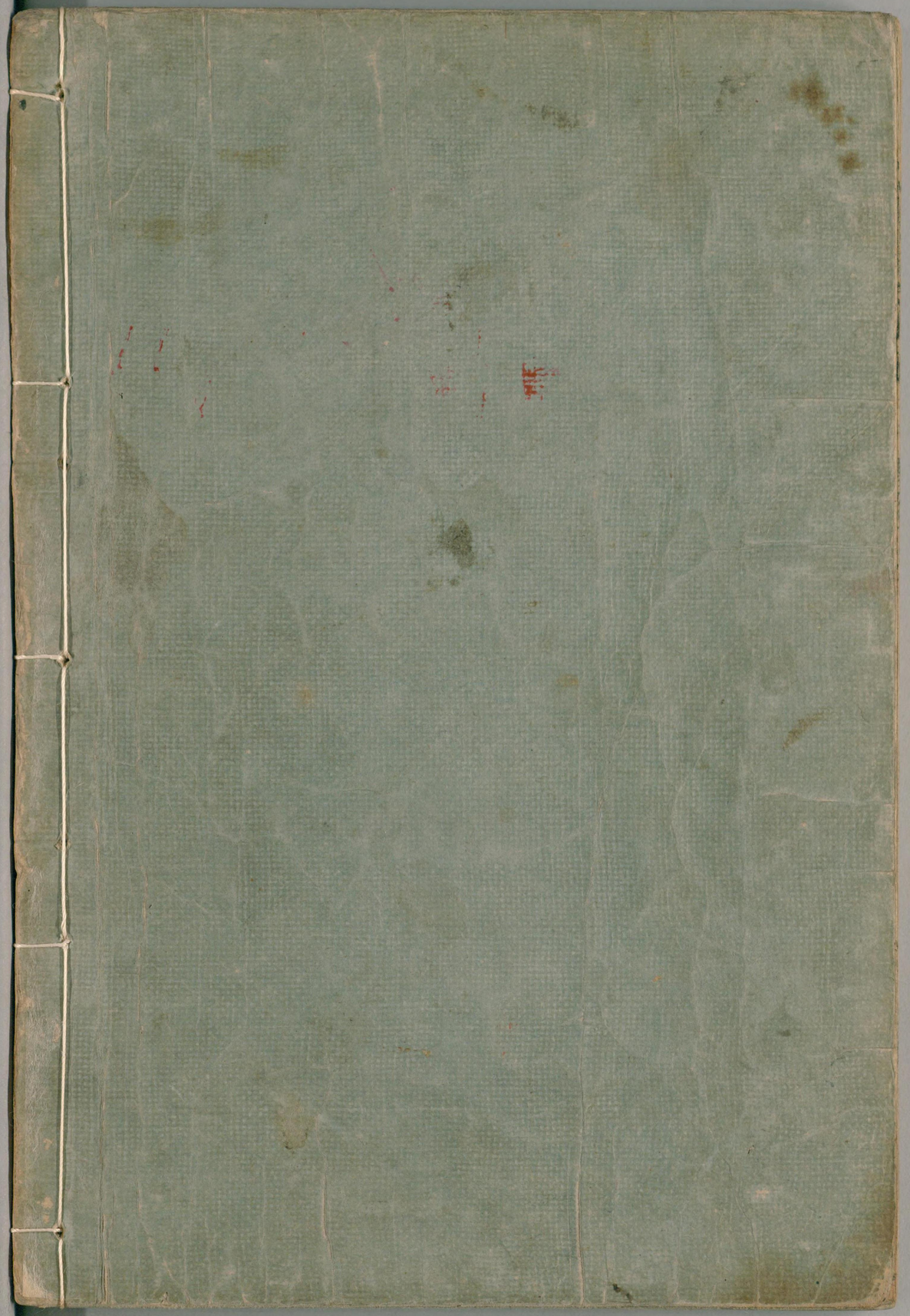
国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

あの八条と云しは、又ある人のよそおくにも、指揮をなしく人の地位
を求るやうの事に、味して若なるべきさまは世中なる所へ
歴々の士大夫とよばれて、実なる乞食なる人をわきて、此八条
名なる乞食なるまでとも、実なる士大夫といふべし。又加賀の国野田
山といふ所に、前田家先祖代々の家中の諸士
も死すれば、其麓に葬られなすなり。さる所中元に六条く
より墓前に燈籠を具へ、毎歳の事なるに、摩候の者来りて候
を遣して人をつけ置てもちもすれど、其外なる大方のもの捨られ
ハとうし捨て給ぬるに、下郎の悪党ども集て火をともし、燭
燭を奪ひ去て、側に乞食ともつもりき者あるを、とぎの物なく

挑し居たる乞食ども、その燭をとりて、人の祖考の為ある所に墓
にすゝめ捨たるをさやうに狼藉するものあるべきにあらずと制し
其者を悪党どもが修する所に罵り、あまたをの物取りとして
いらぬことをいふ奴ならと打しかり、その乞食をして、各の今する
やうなる事をせねばならぬといふものなりとて、斉の穢者
の嗟来の食を食せざる故に、あまりなるといひしに俗に相
似く。おそらく是ぞ待る、此乞児舜令をもてよるかたの言箇
なく意足といふべし。法をそむる事のやうなる事なき
とも古も今もかはらずにあるは、節義のちるをわれ人わきまへ
凍餒にさく免ずして、溝壑に斃るとも、其名を世に至るを

ゆゑ、ことに、そのよろこび、慰陽并びに吾使の任ぜられ、今般八月の類世よりの発行の事、多の功、前にきゝてゐたれども、さらに委しく書我朝勅撰の本歌集を見るに、そのしるしを列ねたり。優歌を尊卑共別なく、完全備の義は貴賤の分ちなく、完全備の義の述とりたるに、各よろこばれし、前の義倫不倫と云ふ事なし。

駿臺雑話巻三畢



国立国会図書館　　タイトル『駿台雑話 5巻』　請求記号 142-54

ガラス使用